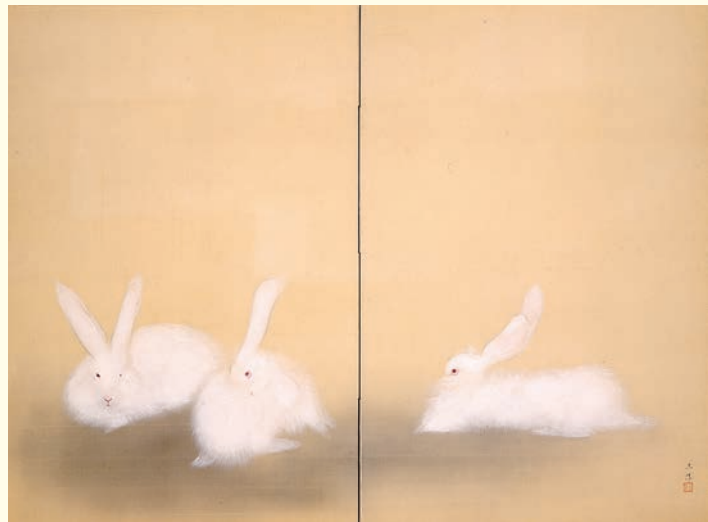




竹内栖鳳《班猫》【重要文化財】 1924(大正13)年 絹本・彩色・額(1面)

Q この猫は何をしているところでしょう？
このネコの毛はどんな色で描かれて
いるでしょう？ 何色を使っているかな？

かんそう
感想



奥村土牛《兎》 1936(昭和11)年 絹本・彩色・屏風(2曲1隻)

Q このウサギは何をしている
ところでしょう？
自由に想像してみましょう！

かんそう
感想



山口華楊《木精》 1976(昭和51)年 紙本・彩色・額(1面)

Q 何が描かれていますか？
なぜ鳥が光っているのでしょうか？
自由に考えて想像をふくらませて
みましょう。

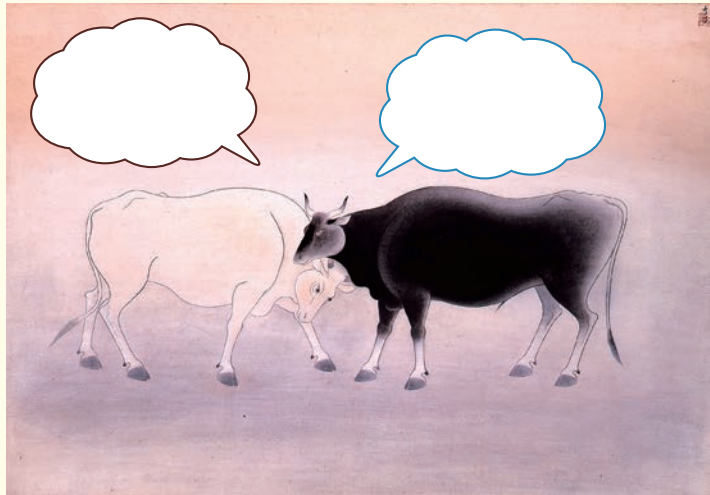
かんそう
感想



福田平八郎《鮎》 1956(昭和31)年 紙本・彩色・額(1面)

Q この魚は今どうしていますか？
この作品の魚の特徴は？

かんそう
感想



小林古径《牛》 1943(昭和18)年 紙本・彩色・額(1面)

Q

このウシは何を^{なに}しているところでしょう？
2頭^{とう}のウシはそれぞれ何^{なん}と言っ
ているでしょう？ ふきだしに自由^{じゆう}に
書^かいてみましょう。それぞれのウシ
の特^{とく}徴^{ちよう}をあげてみましょう。

かんそう
感想



西村五雲《白熊》
1907(明治40)年
絹本・彩色・軸(1幅)

Q

このシロクマは何を^{なに}していると思^{おも}
いますか？ 何^{なん}を持^もっているでしょう？
なぜほえているのでしょうか？

かんそう
感想



Q

ここはどこで
しょう？
何^{なに}が描^{えが}かれて
いるでしょう？
この絵^えの中^{なか}に
動^{どう}物^{ぶつ}が隠^{かく}れて
います。見^みつけ
てみましょう！

富取風堂《漁家春光》
1926(大正15)年
絹本・彩色・額(1面)

かんそう
感想



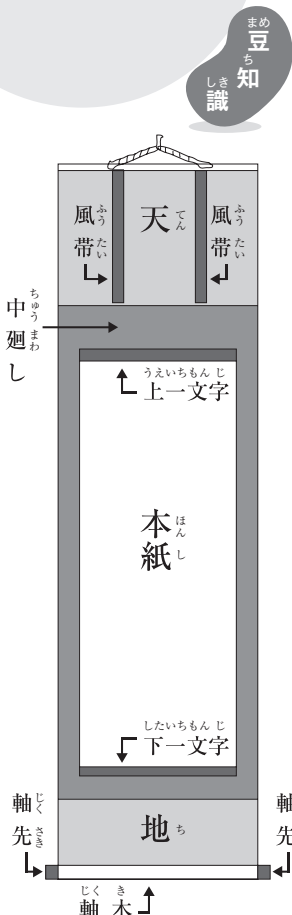
Q

何^{なに}が描^{えが}かれているで
しょう？
この絵^えの中^{なか}であなた
が気^きになるところは
何^{なん}ですか？
気^きが付^ついたことを
あげてみましょう。

速水御舟《炎舞》【重要文化財】
1925(大正14)年
絹本・彩色・額(1面)

かんそう
感想

A シロクマがオットセイをつかまえたところ。



まめ豆
しき知

この作品を最初に発表した時には『白熊(咆哮)』という題名でした。「ほうこう」とはほえることです。また、別名として『捉脇 脇之図』(オットセイをつかまえるの図)という題名もあります。

作者の五雲は、シロクマを明治36年に開園した京都市動物園で写生をしたそうです。餌となるオットセイをつかまえて、周囲を警戒してほえているシロクマは大きくて野生の迫力が伝わってくるようですね。五雲は野生のシロクマを実際に見たわけではありませんが、動物園でのスケッチを基にこの作品を描いています。

かけじく
掛軸とは？

掛軸とは、書や絵画を裂(きれいな布)や紙で表装(縁取り)などをして、床の間などに掛けて飾るものをいいます。この軸装という方法は中国から伝わり、日本でも古くからこの形式で多くの作品を保存したり、飾って楽しんだりしてきました。

A とうぎゅう 闘牛 (たたかっているところ)

まめ豆
しき知

2頭のウシが角を突きあわせている闘牛の様子を描いています。しかし激しくぶつかり合うというより、相手とのタイミングを確かめ合っているような距離感がありますね。はっきりとした輪郭線や白と黒という単純な色によって、この2頭の間にある静かな闘志と緊張感が感じられますか？

日本には、陰と陽、明と暗、静と動、というような違う性質や相反するものを一対(二つで一揃い)とする考え方があります。この作品に描かれているウシもこの一対の考え方が反映されています。

とうぎゅう
闘牛

闘牛というとスペインの闘牛が有名ですね。スペインの闘牛は、闘牛士(マタドール)と牛が戦うものですが、日本の闘牛は牛と牛が戦うものです。「牛相撲」、「牛の角突き」などとも呼びます。闘牛は岩手県久慈市、新潟県長岡市、島根県隠岐島、愛媛県宇和島市、鹿児島県徳之島、沖縄県うるま市などで行われているものが有名です。

A ほのお が とう 炎と蛾9頭

闇の中、メラメラと燃えさかる炎とその炎にまとわりつくように群がるガが描かれています。この作品を描いた御舟は、夏の軽井沢で毎晩のように焚火をして、炎とそれに集まるガを観察したといっています。

炎の表現は絵巻物や仏教絵画にみられるような様式化された描き方に見えます。しかし、その外側は炎の朱色がほのかに闇に映り、はじける火の粉はとても写実的です。この色とりどりのガは、それぞれの種類がわかるほど正確に描かれているのにもかかわらず、すべて正面向きになっています。現実にはありえない光景です。なんとも不思議な世界ですね。

まめ豆
しき知

ちょうやがの数え方

虫は「匹」で数えるのが一般的ですが、ちょうやがは「頭」と数えることがあります。なぜ「頭」と数える習慣ができたかというのは、いろいろの説がありますが、英語の「head(頭)」を直訳して「頭」としたためとか、標本では頭部が重要だから、などといわれています。昆虫学者は「頭」と数えるそうですが、私たちは「匹」と数えても間違いではありません。

A りょうし さぎょうごや 漁師の作業小屋 (納屋)



- ① 庭にニワトリ3羽
- ② いけすに魚5匹(カレイ)
- ③ ネコ(母ネコ1匹、子ネコ3匹)
- ④ たらいに魚5匹(キスのような魚)

春の明るい陽射しとは対照的に薄暗い漁師の作業小屋が描かれています。大正、昭和の時代にはどこにでもあった風景なのでしょう。暗い小屋の中をよく目を凝らして見てみましょう。おや、こんなところにネコが！子ネコもいる！…母ネコが警戒するような目つきでこちらを見ています。作者の風堂はそれぞれの生き物をしっかり観察して丁寧に描いています。



日本画は、西洋画には見られない「余白」を活かす描き方の伝統があります。背景に何も描かれていないからこそ、ウサギのいる場所を自由に想像することができて、まわりの空間にも広がりを感じられますね。

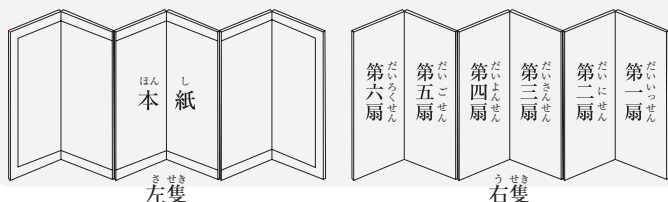
作者の土牛は、アンゴラ兎を飼っている人に頼んで写生をさせてもらったそうです。ふわふわした毛の柔らかな感じとウサギの動きのあるポーズが愛らしいですね。

ウサギの数え方

ウサギの数え方を知っていますか？ 1羽、2羽…と鳥のような数え方をします。どうしてでしょう？ 明治時代以前の日本では、仏教の教えで4本足の動物を食べてはいけないといわれていました。鳥は食べてもよかったため、ウサギを「鶺鴒」と鳥仲間だからとか、耳が羽のようで鳥のように飛ぶ(跳ぶ)からという、いろいろな理由をつけて食べていたようです。現在は「羽」でも「匹」でもどちらの数え方も正しいとされています。

屏風とは？

この作品は二曲一隻の屏風に描かれています。屏風とは「風を屏ぐ」という言葉どおり、風をさえぎったり、部屋の仕切りや室内を飾るための家具のようなものとして使われてきました。屏風の片方を一隻といい、二つ(二隻)で一雙と数えます。1つの画面を扇といい、折りたたむ画面の枚数によって二曲、六曲と呼びます。下の図の屏風は六曲一雙の屏風です。



泳いでいる。魚の肌がつるりとして、なめらかな形(流線型)になっている。

作者の平八郎は魚釣りが好きだったそうです。アユを描いた作品も多く、その流線型の形と流動感にひかれて描いたといっています。この作品のアユの姿は単純化されていますが、ぬめりのある肌の感じと形の特徴的なところは残していますので、アユだとわかります。

アユ釣りの季節とアユの縄張り

アユは、サケ目アユ科に分類される海と川を回遊する魚です。稚魚の時には海や河口でプランクトンを食べ、4〜5月頃になると川を上り、石に付いたケイソウ類(藻)を食べようになります。このアユが川を上る初夏から夏にかけてが、アユ釣りの季節となります。若い魚の多くは群れをつくりますが、特に体が大きくなったアユはえさの藻類が多い場所を独占して縄張りを作るようになります。この縄張り内に入った他の個体に体当たりなどの激しい攻撃を加える性質を利用してアユを釣るのが「友釣り」です。この作品に描かれているアユは、群れているので若いアユということでしょう。



毛づくろいをしている。

このポーズのヒミツ…実は背中にハチミツを塗ったそうですよ！

白色、黒色、茶色、黄土色、金色

毛を一本一本、面筆筆という細い筆で色を重ねて描き、ふわふわした毛の感じを出しています。よ〜く見てみましょう！



作者の栖鳳は「動物を描かせたら右に出る者はいない」と言われたほど、動物を描くのがうまい画家でした。背中をなめるネコのしなやかな動き、柔らかな毛、じっと見つめるグリーンの目一まるで本物のネコがすぐそこにいるようです。自分の画室でネコを遊ばせながらじっくり観察と写生をしたからこそ描けた作品です。

落款と印章

作者の名前を書いた署名(サイン)のことを落款といいます。(時には署名の代わりにおしたハンコのことも落款という場合があります)印章とはハンコのことです。作者はネコと余白(何も描かれていない空白の部分)の位置とバランスを考えぬいて落款と印章をいれています。試しに落款と印章を手で隠してみましょう。無いとどんな感じですか？ 別のところに移動させたらどうでしょうか？

ミミズクとけやきの木

この作品は、京都の北野天満宮にある樹齢400年のけやきを描いたものです。作者の華楊は大きなけやきの幹、その根の入り組んだ曲線、そして長い年月の間、雨や風などに耐えてきた樹の神秘的で不思議な感じを形にしたいと思って制作したといえます。山奥の感じを出すために、苔むした幹になっています。また、静けさを強調するために、以前飼っていたミミズクを添えたそうです。このミミズクは「木の精」なのかもしれませんね。

ミミズク、フクロウの違いとは？

フクロウとミミズクはどちらも同じフクロウ目フクロウ科の鳥です。その中で、耳のように見える羽(羽角または耳羽という)をもつものがミミズクと呼ばれています。

学問の神、フクロウ

フクロウは、森の賢者、住居の守り神、学問の神様としてよく知られています。ギリシャ神話における知恵と技芸の女神・アテナ(ローマ神話ではミネルバ)の従者として、知性、学問、工芸の象徴となっています。

